

Title	実践的推論の合理性と論証の妥当性： アンスコム「実践的推論」再考
Sub Title	Rationality of practical reasoning and validity of arguments : rethinking Anscombe's "Practical inference"
Author	中根, 杏樹(Nakane, Anju)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2022
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.149 (2022. 3) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	The idea that logically valid arguments are normative for theoretical reasoning has been, and continues to be, widely accepted. But what about practical reasoning? How can we understand the relation between practical reasoning and valid arguments? I discuss these questions by offering an interpretation of Anscombe's "Practical Inference" (PI). In Section 1, I distinguish reasoning and argument, and further, rationality of reasoning and validity of arguments. In Section 2 and Section 3, I reconstruct PI by means of these distinctions. In Section 2, I criticize two conceptions of the relation between practical reasoning and valid arguments by extracting the crux of Anscombe's criticism of von Wright's view. In Section 3, I present three claims from PI: (1) rationality both of theoretical reasoning and of practical reasoning depends on the validity of the corresponding argument; (2) these two kinds of reasoning have different roles; (3) they depend on the same argument in different orders. In Section 4, I show that the third claim is false by means of counterexamples; I conclude that we can reasonably accept the first and the second claims but not the third.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000149-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実践的推論の合理性と論証の妥当性

——アンスコム「実践的推論」再考——

中 根 杏 樹*

Rationality of Practical Reasoning and Validity of Arguments: Rethinking Anscombe's "Practical Inference"

Anju Nakane

The idea that logically valid arguments are normative for theoretical reasoning has been, and continues to be, widely accepted. But what about practical reasoning? How can we understand the relation between practical reasoning and valid arguments? I discuss these questions by offering an interpretation of Anscombe's "Practical Inference" (PI). In Section 1, I distinguish reasoning and argument, and further, rationality of reasoning and validity of arguments. In Section 2 and Section 3, I reconstruct PI by means of these distinctions. In Section 2, I criticize two conceptions of the relation between practical reasoning and valid arguments by extracting the crux of Anscombe's criticism of von Wright's view. In Section 3, I present three claims from PI: (1) rationality both of theoretical reasoning and of practical reasoning depends on the validity of the corresponding argument; (2) these two kinds of reasoning have different roles; (3) they depend on the same argument in different orders. In Section 4, I show that the third claim is false by means of counterexamples; I conclude that we can reasonably accept the first and the second claims but not the third.

* 慶應義塾大学／日本学術振興会

はじめに

理論的推論が論理の規範のもとにあるという考えは伝統的に受け入れられてきた。では、実践的推論はどうだろうか？ 実践的推論の場合、論理が規範的であるという想定は理論的推論の場合ほど自明ではない¹。もしかすると、実践的推論に関しては論理の規範性は成り立たないかもしれない。これが実践的推論と理論的推論の基本的な違いなのだろうか？

本稿は、実践的推論と論理の関係の解明、それと関連して、実践的推論と理論的推論の異同の解明に貢献することを目指す。この目的を達成するため、私はエリザベス・アンスコム（Elizabeth Anscombe）の「実践的推論（“Practical Inference”）」という論文（以下“PI”）の再構成と部分的な批判を行う。アンスコムのPIに関してはすでに何本か論文がある²。したがって、PIを改めて検討する必要はないと考えられるかもしれない。だが、私の考えでは、PIには実践的推論と論理の関係、実践的推論と理論的推論の異同に関する興味深い議論や洞察が含まれている。これらは、PIにおける用語の分かりづらさやPIで提示されている誤った主張によって不明瞭なままに留まっている³。

第1節ではまず、アンスコムの議論を再構成するための用語の整理を行う。そこでは、論証と推論、そして妥当性と合理性を区別する。第2節と第3節では、この整理をもとにPIの議論を再構成する。第2節においては、実践的推論と論理を関連付ける誤った方針を退ける議論として、アンスコムのゲオルク・ヘンリク・フォン・ウリクト批判を解釈する。第3節では、この問題に関するアンスコム自身の三つの積極的な主張を提示する。その三つとは、以下の主張である。(1) 実践的推論の合理性と理論的推論の合理性はどちらも、同じ論証に依存する。(2) 第二に、推論の役割・推論の目的に違いがある。(3) その結果として、実践的推論と理論的推論では、論証を反対方向に用いることになる。第4節では、第一の主張と第二の主張を受け入れつつ、第三の主張を批判し、論証を用いる方向は実践的推論と理論的推論を区別するものではないと論じる。

1. 準備作業：論証と推論／妥当性と合理性

PI は、フォン・ウリクトの実践的推論観を議論の叩き台にして進む。アンスコム³の解釈では、フォン・ウリクトの実践的推論観の根底にあるのは、「実践的推論が存在するのであれば、その推論には妥当性ないしそれに類するもの〔such a thing as its validity〕がなければならない。そして妥当性は必然性と結びついている」という洞察である（PI, p.110: 192 頁）⁴。アンスコムは、PI において、「実践的推論が存在するのであれば、その推論には妥当性ないしそれに類するものがなければならない」という前者の主張に同意しつつ、「妥当性は必然性と結びついている」という後者の主張を批判する。だが、前者の主張は説明なしに前提されたまま議論が展開されている。また、「妥当性」が曖昧であるがゆえに、後者の主張に対する批判も明瞭とは言い難い。ある推論が妥当であるとは、推論の前提が真であれば結論も必ず真であるということではないのか。妥当性が必然性と結びついているのは当然ではないだろうか。このように考えつつ読み進めたとき、アンスコムの議論は、理解しがたいものとなる。

私の解釈では、「妥当性」の二つの意味を導入して議論を整理することで、われわれは PI におけるアンスコムの主張を明晰にできる。そして、この整理を踏まえるならば、「実践的推論には妥当性がなければならない」という主張はより説得的になるはずだ。

1.1. 論証と推論の区別

「妥当性」の区別を導入するにはまず、論証 (argument) と推論 (reasoning) の区別を導入する必要がある⁵。事例からはじめよう。ある朝、私は朝早くに目が覚めた。自分と母親に朝食を用意するつもりだ。母親は何時頃起きるだろうか？ 思い出してみると、今日は日曜日である。今日が日曜日ならば、母は 8 時頃に起きる。そうすると、母は 8 時頃に起きる。この事例において私は、「今日は日曜日である」という信念と「今日が日曜日

ならば、母は 8 時頃に起きる」という信念から、「母は 8 時頃に起きる」という信念を導く推論を行っている。

以上の推論は、私が朝早く起きたある朝の 8 時前に行ったことである。つまり、鴻が指摘するように、推論は「時間空間的な広がりの中に存在する何かだろう」（鴻，2014，29 頁）。しかし、信念から信念への推論の適切性は、無時間的な何かに依存している。以上の推論が適切であるのは、信念の内容のあいだに、「今日は日曜日である」という前提と「今日が日曜日ならば、母は 8 時頃に起きる」という前提から「母は 8 時頃に起きる」という結論が帰結する、という構造が成り立っているからである。こうした命題的構造は、時間的位置をもつ心的作用としての推論から区別されるべきだ。特定の信念から特定の信念を導くということは時間的位置をもつものに対し、この構造において前提から結論が帰結するということは無時間的に成り立つ。この点は、算術の事例を考えてみるとより明白になるであろう。ある小学生が小テストで「 $3+4+5$ の答えは？」という問題を解いて「12」と解答する。その小学生は特定の時間にその計算を行っている。他方で「 $3+4+5=12$ 」自体は、無時間的に成り立つ。

このように、心的作用としての「推論」とその内容の命題的構造としての「推論」には、まったく異なる性質が見いだされる。この二つは厳格に区別されるべきだろう⁶。そこで、心的作用を「推論」、命題的構造を「論証」と呼んでこの二つを区別する。

私の理解では、アンスコム自身の言葉遣いにおいて、推論 (inference) は、推論 (reasoning) を意味することも論証 (argument) を意味することもある。この点には異論があるかもしれない。というのも、アンスコムは「推論する」を心的動詞として分類することに抵抗しているからである (PI, p.112: 196 頁)。だがその近くでアンスコムが「そのこと〔ある命題が別の命題から帰結すること〕が分かっている〔seeing〕ということ以外に、推論を実際に行っているということが意味することが何かほかにあるだろうか？

私は、ないと思う」と述べていることにも注意してほしい (PI, p.112: 196 頁)。この「分かる」は明らかに、われわれの心の働きである。したがってここでアンスコムは、推論を心的行為として理解するといった見方を拒否しているのみで、推論の心的な側面は認めていると読める。したがって、一方で、「推論 (inference)」は心的作用としての推論 (reasoning) を指していることがある。他方で、「推論の形式」、「推論ステップ」といったものは命題的構造のみを表しており、論証 (argument) のみを意味している。以下では、アンスコムの引用以外の部分では、この二つを厳格に区別し、「推論」によって reasoning を、「論証」によって argument を意味する。

1.2. 妥当性と合理性の区別

この区別に対応して、われわれは推論と論証のそれぞれに妥当性と呼べるものがあることを発見するだろう。一方で、論証の妥当性は、論理学において用いられる意味での妥当性である。ある論証について、その論証の前提すべてが真でありつつ結論が偽であるような真理値の割り当てが存在しない、ということだ。他方、推論に関しても、われわれはある推論が妥当かどうかを、この専門的な意味とは異なる意味ではあれ語りうる。たとえば、先の事例において、例の前提を信じるときその前提ゆえに結論を信じるようになるのは妥当であると言ってもいいように思える。こうした、推論の妥当性を、「合理性」と呼ぼう⁷。

私の見たところ、アンスコムは「妥当性」を論証の妥当性と推論の合理性のどちらかを意味して用いる。たとえば、彼女が「 p, p ならば q , ゆえに q 」の妥当性」と言う場合には明らかに、「妥当性」は論証の妥当性を指している (PI, p.138: 240 頁)。しかし、そうではない箇所もある。アンスコムは、「妥当性の評価とは、根拠を根拠として評価することに結びついている」(PI, pp. 112–113: 197 頁) と言い、この意味を PI の最後で明示する。PI の最後にアンスコムが理論的推論の妥当性を特徴づける仕方は、

「もし p と信じるのが適切ならば、 q と信じることは適切であるか、少なくとも、 q であることには信憑性がある。そして、 p と信じる人が「 p ゆえに」 q と信じることは理解可能である (intelligibly)」というものだ (PI, p.146: 253 頁)。こうした箇所では、なんらかの根拠にもとづいて特定の態度や行為に至る推論が理解可能であるということ、すなわち合理的であるということ¹を妥当性として扱っている。

さて、以上を踏まえたうえで、「実践的推論には妥当性がなければならぬ」における「妥当性」は、どのように理解されるべきだろうか？ 論証の妥当性が必然性と結びついているのは明らかである。したがって、「妥当性は必然性と結びついている」という主張に対するアンスコム²の批判を踏まえるなら、「実践的推論には妥当性がなければならぬ」における「妥当性」は、推論の合理性という意味で解されるべきである。

そして、このように理解するなら、「実践的推論には妥当性がなければならぬ」という主張は説得的である。このことは、推論と推論以外の比較を通じて見えてくる。推論を行うことは、「学会が近づいてきたぞ」、「ところで、なんだかお腹が空いてきた」とただ無関係なことを思い浮かべることは違う。推論とはたとえば、「空腹を満たそう」と欲求し、「冷蔵庫にはスイカがあったはずだ。冷蔵庫のスイカを食べれば、空腹は満たされるだろう」と考えて、「冷蔵庫のスイカを食べる」ことだ。この事例において、ただの思いつきの連鎖などとは違って、冷蔵庫のスイカを食べるという行為は前提から合理的に根拠づけられている。こうした合理性の余地がなければ、思いつきの連鎖とは異なる論理的に筋の通った思考（推論）について語れないだろう。したがって、たしかに実践的推論の合理性は、実践的推論にとって必要だ。

ここまでで、私は推論と論証、推論の合理性と論証の妥当性を区別してきた。だが、たとえば先の朝食の事例で推論の合理性が妥当な論証に依存していたように、推論の合理性が妥当な論証の成立から独立であるとは考

え難い。推論の合理性が妥当な論証に依存しているということ、「はじめに」の言葉を使えば、推論が論理の規範性のもとにあるということは、理論的推論の場合にはとりわけ明白である。しかし、実践的推論の場合に関しても同じように言えるのだろうか？ 議論を先取りすると、PI は「実践的推論の合理性もまた妥当な論証に依存する」という主張を擁護する論文として解釈されうる。しかし、この繋がりには理論的推論の場合よりも捉えがたく、この繋がりを捉えようとするとき容易に誤りに陥ってしまう。アンスコムは、フォン・ウリクトを批判するなかで、こうした誤りを退ける。

2. アンスコムのフォン・ウリクト批判

2.1. アンスコムによるフォン・ウリクト理解⁸

実践的推論には合理性がなければならない。そして、実践的推論の合理性は妥当な論証と結びついているように思われる。この結びつきをどのようにして説明するか？ アンスコムの理解では、フォン・ウリクトは実践的推論の合理性を意図と行為のあいだに成り立つ論理的必然性によって説明しようとした。この説明によれば、実践的推論が合理的であるには、前提の態度と結論の態度や行為のあいだに、前者が成り立てば後者が論理的に帰結するという、論理的必然性が成り立つ必要がある。推論が合理的であるためには、意図と行為が妥当な論証を構成しなければならない、というわけである。こうして、フォン・ウリクトは、以下の形式を提示する。

A は、p を時刻 t に生ぜしめようと、いまから意図する。

A は、時刻 t' までに a を為さなければ、p を時刻 t に生ぜしめることができないと、いまから考える。

それゆえ、A は時刻 t' になったと思うときまでに、もしその時刻を忘れず、あるいは阻止されなければ、a にとりかかる。(von Wright, 1971, p.107: 139 頁)

このフォン・ウリクトの図式では、 p を生ぜしめようという意図は、特定の条件を満たしたとき必然的に、 p の手段である行為 a を帰結する。フォン・ウリクトは、意図と行為の必然的な関係によって、実践的推論の合理性を説明しようとした。アンスコムは表現を借りるならば、「行為の生起に関する真理を必然的なものとして理解することこそが、推論の妥当性をどう理解するかに関する彼なりの考えなのである。彼は、前提と結論の関係が「論理的強制の関係」であることを期待した」(PI, p.114: 199 頁)。

2.2. 第一段階の批判：意図と行為に論理的必然性は成り立たない

このフォン・ウリクトの推論図式に対するアンスコム批判は、二段階に分かれる⁹。

第一段階は、意図と行為のあいだに論理的必然性を見出そうとすることに対する批判で、要するに、論証と推論、論証の妥当性と推論の合理性を区別し損ねているという批判である。アンスコムは二つの議論によって、この批判を遂行する。

第一の議論。フォン・ウリクトは、前提から結論を導く論証の構成要素のなかには意図が含まれる、と考える。しかし、典型的には論証のなかに意図や欲求は現れないはずであり、仮に意図や欲求が現れたとしても、推論に通常関わっている意図や欲求とは、役割が違うはずである。アンスコムは提示する事例を紹介しよう。

自分の親を殺したい人は誰でも、精神科の診察をうければ、その厄介な欲求を取り除く手助けをしてもらえるだろう。

私は自分の親を殺したい。

精神科の診察をうければ、私はその厄介な欲求を取り除く手助けをしてもらえるだろう。

NN は精神科医だ。

それゆえ、私は NN の診察をうけよう。(PI, p.115: 201–202 頁)

私が「NN の診察をうける」ことを以上の論証を通じて決断するとき、私はその厄介な欲求を取り除きたがっていることが分かる。この〈「私は厄介な欲求を取り除きたい」という欲求〉と〈「私は自分の親を殺したい」という論証に現れた欲求〉は、推論における役割を異にする。私は、上述した論証を内容とする推論において、「私は厄介な欲求を取り除きたい」という欲求の実現を目指している。他方で私は、この推論において、「私は自分の親を殺したい」という欲求の実現を目指しているわけではない。「私は自分の親を殺したい」ということは、現に成り立つ事実としてのみ扱われており、この推論において、「私は自分の親を殺したい」は、信念の内容としての役割を果たしている。以上二つの欲求がもつ役割の違いは、推論において実現が目指されている欲求や意図と、論証を構成する欲求や意図とを区別する必要性を示している。

第二の議論。そもそも、論理的強制の関係は、意図と行為のあいだに成り立つものではない。アンスコムは理論的推論を念頭に起きつつ、次のように言う。

こう言われるかもしれない。「しかし、論理的必然性は、 p を主張することから q を主張することを導く推論を正当化するのであり、その論理的必然性を把握することによって q を信じるように強制される！」この考えは混乱している。主張に関わるその推論を正当化するのは p と p ならば q の真理値にすぎない。そのような正当化が成立している場合は、われわれは確かにその真理結合を「論理的必然性」の結合と呼ぶ。それでは、信念はいかにして「強制」されうるのか。[...] ここで求められていることは、信念があくまでも「論理的に」強制されているということである。しかし、論理的強制ということで、あの論理

的必然性、すなわち真理結合が存在すること以外に何を意味するのだろうか。 (PI, p.130: 226 頁)

アンスコムが言うには、「論理的強制」と呼べるようなものがあるとすれば、命題のあいだに成り立つ真理結合、前提がすべて真であれば結論も必ず真であるという結合である。こうした結合が信念、欲求、行為のあいだに成り立つとは言えない。

2.3. 第二段階の批判：実践的推論は合理的必然性を伴わなくてもよい

以上の批判を受けて、フォン・ウリクトは自説を修正することができるとし、たしかに、実践的推論の合理性を意図と行為のあいだの論理的必然性によって主張することはできない。しかし、たとえば妥当な論証にもとづく合理的必然性によって説明できるかもしれない。理論的推論を例に考えてみよう。「p」と「 $p \rightarrow q$ 」から「q」が論理的に帰結することによって、「p」と信じ、しかも「 $p \rightarrow q$ 」と信じている人は、合理的であるためには「q」と信じなければならない、と言えそうだ。同じことが実践的推論にも成り立つのではないか。ある人が、q が実現しなければ p も実現しないと信じている、つまり「 $p \rightarrow q$ 」が成り立つと信じているとしよう。さらに、その人が p の実現を意図していると仮定するなら、その人は合理的であるためには q の実現を意図しなければならない、とは言えるのではないだろうか。この場合、「p, p ならば q, ゆえに q」の妥当性によって合理的必然性が成り立っている。そして、ある実践的推論が合理的であるということは、その推論において妥当な論証にもとづく合理的必然性が成り立つということであると考えられるのではないだろうか、と。

こうした可能な修正案を予想し、アンスコムは、実践的推論が合理的であるためには合理的必然性も必要ないと指摘する。

実践的根拠が、その手段に訴えることによつてのみ目的が達成できる
 ということを示している場合には、それは行為を「要請」するかもしれ
 ない。しかし、実践的根拠は、目的がある手段によつて達成される
 だろうということを示しているにすぎない場合でも、同様に根拠なのである。
 したがって、実践的根拠は結論（行為）を必然化しうるとい
 う意味においてのみ根拠である必要はない。（PI, p.120: 210 頁）

フォン・ウリクトの図式は、目的達成にとって必要不可欠な手段を導く実践的推論のみを想定している。しかし、われわれは実践的推論を通じて必要不可欠ではないような手段を導くこともあるはずだ。冷蔵庫のスイッチを食べる事例を思い出そう。空腹を満たそうと考えたときに、冷蔵庫にスイッチがあったことを思い出して冷蔵庫のスイッチを食べるのは合理的であった。しかし、私が戸棚にクッキーが残っていると気づいて戸棚のクッキーを食べるのも、それはそれで合理的な行為だったはずである。

以上の二段階の批判によつて、実践的推論の合理性は、論理的必然性によつても妥当な論証にもとづく合理的必然性によつても説明されない、ということが分かった。

3. 実践的推論に関するアンスコムの方の主張

3.1. 実践的推論の合理性も論証に依存している

こうした議論を踏まえ、アンスコムは改めて、「どのような意味で、実践的推論は推論なのか」と問う（PI, p.121: 211 頁）。以上で見てきたフォン・ウリクトへの批判は、理論的推論の合理性とは違つて、実践的推論の合理性は妥当な論証に依存しない、ということを示唆していると考えられるかもしれない。そして、そう考えると、妥当な論証に支えられた、論理的に筋の通つた実践的推論なるものの存在が疑わしくなるからである。

実際、実践的推論の合理性と論証の関係を疑う、さらなる一見したとこ

ろの根拠がある。スイカを食べる事例では、私の推論は内容上誤謬の形をとる。私は、「空腹を満たす (p)」ことを目指して、「冷蔵庫のスイカを食べるなら、空腹を満たす ($q \rightarrow p$)」ことになると考えて、「冷蔵庫のスイカを食べる (q)」。この推論は、内容の命題だけに着目すると、「p, q ならば p, q」という形をしている。これは妥当な論証ではなくむしろ後件肯定の誤謬の形を取っている。アンスコムは、アンスニー・ケニーの議論を引き合いに出しながら、このことを確認する。「誰かを殺せ」からある特定の人を殺すことへの推論。また選言の命令から選言肢の命令に従うことへの推論。q という要求と、p ならば q という情報によって、p を実行するという決断へと至る推論。これらすべての推論は、命題論理においては誤謬となる」(PI, p.122: 212 頁)。そうであればなおさら、推論の合理性は妥当な論証に依存すると想定しつつ実践的推論を「推論」と呼び続けることはできないように思われてくるだろう。

ここでアンスコムは、「推論の合理性は妥当な論証に依存する」という想定を否定することもできる。しかし、アンスコムはその道には進まない。合理的必然性がない場合でも、妥当な論証はたしかに実践的推論を合理的にする、と考える。

このように考える際にアンスコムが足がかりにするのは、実践的推論は何かを実現すること、真にすることを旨とした推論である、という点だ(PI, p. 124: 216 頁)。実践的推論が合理的であるには、行為者からみて目的の実現に手段が役立つのでなければならない。そして、目的の実現に手段が役立つことは、妥当な論証によって立証される。アンスコムは、次のように言う。

「もしこれを為すのなら、彼は目的達成にしかじかの関連がある状況をもたらすだろう」という条件文で考えてみよう。このような条件文と、そこで示されている目的達成への関連性は、それら自体、さまざま

まな事実からの「通常の」推論によって立証されるだろう。(PI, p.124: 216 頁)

たとえば、先ほど形だけ見れば誤謬であると確認した、「選言の命令から選言肢の命令に従うことへの推論」を考えてみよう。「A を殺す (p) か、B を殺す (q) か、どちらかを実行せよ」という命令が下されたとき、命令を下された人が「A を殺す (p)」としよう。「 $p \vee q$ 」から「p」は論理的に帰結しない。しかし、このとき「A を殺す (p)」ことが「A を殺す (p) か、B を殺す (q)」という命令の実行に役立つことは、「p」から「 $p \vee q$ 」を論理的に導出する論証によって立証される。そして、この妥当な論証が成り立つからこそ、この命令を下されたときに A を殺すのは合理的だ。スイカの例でいえば、「冷蔵庫のスイカを食べる」と「冷蔵庫のスイカを食べるなら、空腹を満たす」から「空腹を満たす」が導かれるからこそ、スイカを食べるのは合理的だ、と考えられる。

もちろんこの場合、スイカを食べることだけが合理的であると示されたわけではないため、スイカを食べることに合理的な必然性はない。しかも、ほかの事情と照らし合わせると——たとえば、そのスイカを食べずともクッキーで空腹を満たせること、「夕飯後に一緒にスイカを食べよう」と父と約束していることを考慮すると——スイカを食べることの合理性はさらに弱まるかもしれない。殺害の例に関しても同様で、B を殺すことよりも A を殺すことが合理的である、といったことは「A を殺す (p)」が「A を殺す (p) か、B を殺す (q)」を導くということからは示されない。このことはアンスコム自身も認めているように思われる。彼女が言うには、「遂行可能な真理条件のうちでも、どのようなものが実践的関連性をもつか。こういった制限に関して、われわれは論理的な条件を述べることはできない」(PI, p.131: 229 頁)。妥当な論証だけが推論の合理性を完全に決定するわけではない。だが同時に彼女が指摘しようとしているのは、それ

らが無関係であると考えるのも間違っている、ということだ。目的の実現に手段が役立つことは妥当な論証によって立証されるのであり、それゆえに、推論の合理性が論証の妥当性に支えられているということは認められるべきだ。

そして、論証は、第1節で確認したように、実践的推論だけでなく理論的推論の合理性をも支えている。以上よりアンスコムは、実践的推論と理論的推論においてその合理性はどちらも同じ論証に依存する、という結論に至る。

推論を「支えている〔stand behind〕」論理的必然的な結合を与えるようなものとして、論理的に真である推論ステップを示そうとするならば、その推論ステップを構成する条件文は、実践的推論でも、それに対応する「理論的」推論でも、厳密に同一のものとなるだろう。(PI, p.132: 230 頁)

3.2. 実践的推論は役割と論証の配列順序において理論的推論とは異なる

しかしそうだとすると、実践的推論の独自性、実践的推論を理論的推論ではなく実践的推論たらしめている特徴はどのようなものになるだろうか？ 「以上のこと〔実践的推論と理論的推論はどちらも妥当な論証に依拠していること〕をすべて考慮したうえでも「通常の」推論——すなわち、前提から結論が真であることへと移行する推論——以外に他の種類の推論はありうるのか」(PI, p.124: 216 頁)。

アンスコムは実践的推論に特有の特徴を二つ指摘する。一つ目の特徴は、推論の役割・目的、いわば推論の心理的側面にある。理論的推論は信念を導く推論である。それに対して、実践的推論は決断、意図、行為を導く。「実践的推論と理論的推論との主な相違は、それらの推論ステップにどのような役割が課されているのかという点にある」(PI, p.132: 229–230 頁)。

二つ目の特徴は、アンスコムが言う「推論ステップの配列順序」に関わる (PI, p.133: 231 頁). ここでアンスコムが見出そうとしている対比は、具体例を見ると分かりやすい. 次の例を考えてみよう. 私は明日学校に 8 時までには到着したいと思っていて、何時に家を出発すればいいのかを考えている.

「8 時に私は学校に到着する (p)」ことを意図する.

「7 時に私が家を出発するなら、8 時に私は学校に到着する ($q \rightarrow p$)」と信じる.

「7 時に私は家を出発する (q)」ことを意図する.

この実践的推論の場合、前提は p で、結論は q である. アンスコムによれば、同じ論証にもとづいていても、理論的推論の場合にはこの前提と結論は、次のように逆になる. 私は、7 時に家を出発することはすでに決まった状態で、何時に学校に到着するのかを考えている.

「7 時に私は家を出発する (q)」と信じる.

「7 時に私が家を出発するなら、8 時に私は学校に到着する ($q \rightarrow p$)」と信じる.

「8 時に私は学校に到着する (p)」と信じる.

この場合、前提は q で結論は p である. この前提と結論の逆転をもって、アンスコムは理論的推論と実践的推論では、推論ステップの配列順序が違う、と言う (PI, p.133: 231 頁).

ここで一つ注意してほしい. 先に確認したようにアンスコムは、実践的推論と理論的推論で論証自体は同じであると考えするため、こうした命題の配列順序の違いを論証の違いだとは考えない. アンスコムの考えはむしろ

ろ、同じ論証が実践的推論と理論的推論で異なる方向で用いられるということだ。つまり、どちらの推論においても同じ論証が合理性を支えているのだが、理論的推論においては妥当な論証の前提から結論へと順方向に推論するのが合理的であり、実践的推論においては妥当な論証の結論から前提へと逆方向に推論するのが合理的である。先の事例では、「 q 」と「 $q \rightarrow p$ 」から「 p 」が帰結するがゆえに、理論的推論に関して言えば、「 q 」と信じ「 $q \rightarrow p$ 」と信じているとき「 p 」と信じるのは合理的であった。そして、実践的推論に関して言えば、「 p 」を意図し、「 $q \rightarrow p$ 」と信じているとき、「 q 」を意図するのが合理的であった。こうして、アンスコム的主張するところでは、同じ妥当な論証によって反対方向の推論が合理的になっている。

このアンスコムの主張は難解であるため、もう一つ例を導入しよう。私は実践的推論の合理性が論証に依存すると論じる際に、「 p 」から「 $p \vee q$ 」への論証が妥当であるとき、「 $p \vee q$ 」を実現せよという命令から「 p 」を意図することへの推論が合理的であることを確認した。このとき、「 p 」という信念から「 $p \vee q$ 」という信念への推論が合理的であった。アンスコムの主張によれば、ここで二つの推論の合理性は「 p 」から「 $p \vee q$ 」への論証という同じ論証に依存してはいるものの、理論的推論においては順方向に（「 p 」と信じることから「 $p \vee q$ 」と信じることへと）推論するのが合理的であるのに対し、実践的推論においては逆方向に（「 $p \vee q$ 」を実現しようと意図することから「 p 」を意図することへと）推論するのが合理的である。

以上よりアンスコムは、二つの推論の異同を以下のように言い表す。

論理的なことから [...] は、理論的推論と〔実践的推論において〕まったく同じであると私は論じた。しかし実践的推論のパターンは理論的推論のそれと異なっている。すなわち要素が異なる順序でおかれる。また命題は主張されるのではなく、真にできる可能性があるものとして提案される。（PI, p.139: 240–241 頁）

こうして、PI の主要な主張は三つである。第一に、理論的推論の合理性と実践的推論の合理性はどちらも、同じ妥当な論証に依存する。第二に、推論の役割に違いがある。第三に、理論的推論と実践的推論において前提と結論の配列順序は逆である。つまり、理論的推論においては妥当な論証の前提から結論へと順方向に推論するのが合理的であるが、実践的推論においては妥当な論証の結論から前提へと逆方向に推論するのが合理的である。

4. アンスコム第三の主張に対する批判

第2節と第3節で私は、PI の議論を再構築し、三つの主張を取り出した。本節では、これらの主張を批判的に検討したい。私が批判するつもりなのは、第三の主張である。この主張は、第一の主張、実践的推論の合理性と理論的推論の合理性はどちらも同一の論証に依存するという主張を脅かす。ケニーは、前提と結論の逆転に着目して、理論的推論と実践的推論は異なる種類の論証に依存すると考えた (Kenny, 1975, pp. 81–82)。第三の主張は第一の主張を揺るがしかねない。

4.1. 論証を逆方向に用いる理論的推論

では、第三の主張はアンスコムにとって不可避のものであったのだろうか。そうではないと思う。アンスコムは、第三の主張を行った後、複数の合理的な推論の事例を提示して論証の配列順序に違いがあると示すことで、第三の主張を正当化しようとしている (PI, p.134: 232–233 頁)。しかし、私の考えでは、実はアンスコムの提示する事例のうちに、第三の主張を疑う根拠が隠されている。引用しよう。

例えば、あることを実現するように試みるか、もしくは、そのことが現象として成立していて、その現象を説明するように試みるか、その

いずれかであるとしてよう。

実現すること：植物のみごとな成長

説明すること：植物のみごとな成長

しかじかの物質が植物に与えられるならば、その植物はみごとに成長するだろう。

それらの物質が土に含まれているならば、それらの物質がその植物に与えられるだろう。

結論：それらの物質を土に入れよう。

結論：土の中にそれらの物質があるか調べてみよう。

これらの仮言文の用い方はいづれも、真である結論に至るための「理論的」使用とは異なる。

前提：土のなかにしかじかの物質がある。

土の中にそれらの物質があるならば、植物にはそれらの物質が与えられるだろう。

植物にそれらの物質が与えられるならば、植物はみごとに成長するだろう。

結論：植物はみごとに成長するだろう。（PI, pp. 133–134: 232–233 頁）

アンスコムはこの引用箇所では、実践的推論・アブダクションと、理論的推論のあいだに対比を見出そうとしている¹⁰。彼女によれば、一方で、実践

的推論とアブダクションにおいては妥当な論証の結論から前提へ逆方向に推論するのが合理的であるが、他方で、理論的推論においては前提から結論へ順方向に推論するのが合理的である¹¹。

しかし、アンスコム議論は本当に成功しているだろうか。アブダクションに着目すると、この問いには否定的に答えるべきだと分かる。アンスコムが述べているように、アブダクションは、検討対象となる仮説を形成するために用いられることもある。したがって、アンスコムがアブダクションを理論的推論の一種として数え上げないことにも根拠はある。だが、これはアブダクションの唯一の在り方ではない。アブダクションは、仮説を形成するためだけではなくその仮説を信じることを合理化するためにも行われうる¹²。先の事例だと、植物がみごとに成長しているということから、土のなかに特定の物質があると信じることは、合理化の程度が演繹的推論の場合と比べて格段に弱いとはいえ、でたらめな思いつきの結果そう信じたりすることとは違って、論理的に筋が通っているかぎりで合理的である。したがって、妥当な論証を逆方向に用いる合理的な理論的推論も可能であるため、実践的推論と理論的推論において前提と結論の配列順序は逆になるとは言えない。

4.2. 論証を順方向に用いる実践的推論

では、当該の主張を弱めて、実践的推論と演繹的な理論的推論において前提と結論の配列順序は逆転すると主張することはできるだろうか。この主張も成り立たない。実践的推論においても妥当な論証を順方向に用いている場合があるからだ。それは、必要な手段を導く実践的推論のケースである¹³。次の例を考えてみよう。

「8時に私は学校に到着する (p)」と意図する。

「8時に私が学校に到着するなら、私は7時には起床している (p→q)」と

信じる。
「私は7時には起床する（q）」と意図する。

この実践的推論は、「 $p, p \rightarrow q$, ゆえに q 」という妥当な論証を順向きに辿っている。必要条件型の実践的推論は演繹的な理論的推論と同じ配列順序になる。以上より、実践的推論と理論的推論において前提と結論の配列順序は逆になるというアンスコム¹⁴の第三の主張は棄却されるべきである¹⁴。

4.3. 同じ論証にもとづく四種類の推論

以上で、私は第一の主張（理論的推論の合理性と実践的推論の合理性はどちらも、同じ妥当な論証に依存するという主張）と第二の主張（推論の心的役割に違いがあるという主張）を受け入れつつ、第三の主張を棄却した。その結果、同じ一つの論証にもとづきながらも、理論的か実践的か、論証を順方向に用いるか逆方向に用いるか、という二つの軸によって特徴づけられる四つの推論を手にした。理論的・順方向的であるのが演繹的な理論的推論、理論的・逆方向的であるのがアブダクション、実践的・順方向的であるのが必要条件型の実践的推論、実践的・逆方向的であるのが十分条件型の実践的推論である（表 1）¹⁵。

表 1

	順方向	逆方向
理論的	演繹的な理論的推論	アブダクション
実践的	必要条件型の実践的推論	十分条件型の実践的推論

この特徴づけは、演繹的な理論的推論と必要条件型の実践的推論のあいだ、そしてアブダクションと十分条件型の実践的推論のあいだに成り立つ類比を示している。この類比を踏まえ、従来の理論的推論研究をもとに実

践的推論の理解を深められると期待できる。最後に、手短ではあるが、この類比から本稿の主張を展開して本稿を閉じる。

まず、演繹的な理論的推論と必要条件型の実践的推論について。演繹的な理論的推論は、分析的 (analytic) ないし解明的 (explicative) 推論であると言われる。つまり、米盛 (2007) の説明を借用すれば、「分析的推論においては前提のなかにすでに結論の内容が含意されていて、前提から結論を導き出す推論の過程は前提の内容を分析し、そのなかに暗々裏に含まれている情報を結論において明確に述べる」(米盛, 2007, 30 頁)。必要条件型の実践的推論についても同じことが言えるだろう。先ほどの、「学校に 8 時までには到着するには 7 時には起床している必要がある」という事例を思い返してほしい。学校に 8 時までには到着するという目的の実現には 7 時に起床することが必ず伴う。必要条件型の実践的推論は、目的が実現されているならば真であるはずの手段を成り立たせることを導くものである。その意味で、前提に含意されている結論を成り立たせようとするものである。もちろん、演繹的な理論的推論は特定の前提に対する信念からそれに含意されている結論に対する信念を導くのに対し、必要条件型の実践的推論は特定の前提に対する意図や欲求からそれに含意されている結論に対する意図や欲求を導くという点で、第二の主張の通り、心理的な違いがある。だが、第一の主張の通りそれらはどちらも論理的帰結関係にもとづいており、しかも特定の事柄から何が帰結するのかを導く推論であるという点でも一致している。

次に、アブダクションと十分条件型の実践的推論について。アブダクションは、分析的・解明的推論と対比して、拡張的 (ampliative) 推論であると言われる。米盛 (2007) が強調するように、アブダクションは、現に成り立っている (少なくともそう思われる) 真理から、それを成り立たせている真理を推測し、仮定することに至る、創造的で拡張的な推論である (米盛, 2007, 64-65 頁)。だが、それは妥当な論証に依存してもおり、その

仮説とその他の前提から現に成り立つ真理が帰結するのでなくてはならないし、そうであるなら、当該の推論はそのかぎりで合理的であると言える。十分条件型の実践的推論においても、事情はパラレルに成り立つ。たとえば、空腹を満たすために、私はスイカを食べることもクッキーを食べることも、さらには冷蔵庫の材料を使って料理をすることもできた。十分条件型の実践的推論は、前提に含意されていないような手段を構想する、創造的で拡張的な推論である。だが、それは妥当な論証に依存しており、手段とその他の前提から目的が帰結するのでなくてはならないし、そうであるなら、当該の推論はそのかぎりで合理的であると言える。もちろんこの場合にも、第二の主張の通り、アブダクションと十分条件型の実践的推論のあいだには、心理的な違いがある。だが、第一の主張の通り、アブダクションと十分条件型の実践的推論は、どちらも論理的帰結関係にもとづいており、しかも、ある特定の事柄がどのようにすれば帰結するのかを逆算する推論であるという点でも一致している。

おわりに

以上より、われわれはPIの再構成と批判を通じて、論証の妥当性と推論の合理性の関係、さらには理論的推論と実践的推論の異同について論じてきた。PIの再構成を通じて取り出した第一の主張と第二の主張によると、実践的推論であろうが理論的推論であろうが、推論の合理性を支えるのは同じ妥当な論証である。だが、実践的推論と理論的推論には心理的な役割における違いがある。この違いに加えて、アンスコムは順向きに推論するのが合理的なのか逆向きに推論するのが合理的なのかという点で実践的推論と理論的推論のあいだに対照性が見出されると考えていた。しかし、第4節の議論にもとづくと、これらの点においてはむしろ同型性が見出される。われわれは同じ妥当な論証を、実践的推論と理論的推論の両方において、順方向にも逆方向にも利用しうる。本稿は以上の議論から副次的に、

四種類の推論を、理論的か実践的か、順方向か逆方向か、という二つの軸で特徴づけ、この特徴づけをもとに二種類の実践的推論がもつ性格の違いを展開した¹⁶。

注

- ¹ もちろん、論理が理論的推論にとって規範的であるというアイデアにも、Harman (1986) で懐疑が提示された。とはいえ、ギルバート・ハーマンの懐疑を乗り越えた説明を提示するという仕事はすでに多数発表されている (cf. Field, 2009; MacFarlane, 2004; Streumer, 2007; 鴻, 2013; 鴻, 2014)。本稿は、これらの仕事にもとづき懐疑の問題を解決しようという前提に立つ。
- ² たとえば、PI の解釈論文として、Alvarez (2010)、Vogler (2001)、早川 (2005)、竹内 (2017) などがある。
- ³ アンスコムの PI を中心に扱った論文ではないものの、鴻浩介は、鴻 (2013) と鴻 (2014) において、同一の論証にもとづいた多様な推論の規範的原理が可能であると論じている。本稿の貢献は、論証／推論の区別を実践的推論に持ち込んで規範性という観点からそれらを関連付けるという点ではなく、その区別にもとづく PI の再構成と第 4 節のアンスコム批判にある。
- ⁴ 邦訳のある文献については、邦訳書の対応する頁数を括弧内の右側に記している。また、訳文は既存の邦訳書に準拠しており、これは以下の引用でも同様である。
- ⁵ ハーマンは、論証 (argument) と推論 (reasoning) を区別して、「論証ないし証明は、推論にもとづく意見の変化という意味での推論と同じ種類のものではまったくない。そこにはカテゴリー上の違いがある」と言う (Harman, 1986, p.3)。この区別は、Harman (1986) 以来、論理の規範性に関する論争において定着している。本稿もこの文脈における区別に倣う。
- ⁶ この区別を、ピーター・ギーチは次のようにして根拠づける。

《m であって、m ならば p、ゆえに p》における、あるいは、《m でなく、m または p、ゆえに p》における〔それぞれ〕二回現れる《p》は同じことを意味しているのであろうか。もしそうなら、いかなる推論もないことになる。というのは、主張《p》は既に前提の部分だからである。もしそうでないなら、推論は《p》の曖昧性によって無効となる。(Geach, 1961, p.133: 246 頁)

この引用は、推論と論証を混同してしまうことの問題を指摘している。前提に現れる「m ならば p」と結論に現れる「p」が同じことを表しているのでなければ

ば、論証は成り立たない。したがって、「p」は同じ内容をもつと考えなければならない。だが、「m ならば p」を真だとみなす人は必ずしも m を真であるとみなしているわけではない。そうでなければ、結論を信じるに至る推論というものとは存在しないことになってしまう。したがって、前提の「p」と結論の「p」では、人は異なる態度を有しているという余地を残すべきである。こうして、態度と内容、ひいては推論と論証は区別されるべきである。

⁷ 合理性に関しては、そのスコープや要請の強さなどについてさまざまな議論がある。こういった問題に関する代表的な文献として、MacFarlane (2004) や Broome (2013) を挙げることができる。(ジョン・マクファーレンは、「合理性」という表現を用いずに「理由」といった表現を用いる。だが、近年のメタ倫理学・認識論において導入された理由と合理性の区別にもとづくなら、彼の議論は、合理性、そのなかでも構造的合理性に関する議論として位置づけられる (cf. Fogal & Worsnip, forthcoming).) どのような問題があるのか具体的に言えば、スコープに関しては、(理論的推論を例に挙げると、) Γ から p が帰結するとき、「 Γ と信じているなら、「p と信じること」は合理的である」のか、それとも、「 Γ と信じる」のが合理的なら、「p と信じること」は合理的である」のか、「 Γ と信じているなら、p と信じること」は合理的である」のか、という問題がある。また、こうした合理性の要請・原理については、それがどの程度の強さをもつのかという問題がある。その要請に従わないことはすなわち非合理的であるのか、従わなくてもただちに非合理的であるということにはならないけれども従うことが (少なくともある程度は) 合理的であるのか、等々。本稿ではこういった問題に答えることはできない。だが筆者の立場を明記しておくと、要請のスコープは広く、要請の強さは推論の種類によって異なると考えている。ここでは、強さの違いを度外視してすべて「合理的」という言葉でまとめている。

⁸ アンスコムがフォン・ウリクト解釈として正しいかどうかは疑わしい。フォン・ウリクトは、みずからの理論を「行為者の想定された意図と認知的態度の観点からふるまいを理解する図式」を目指したものであると述べる (von Wright, 1972, p. 39)。彼は、信念や義務や時制等々の概念を演算子として扱う演繹的なシステムの構築に関心があったと考えられる。この点は柏端達也氏に指摘していただいた。本稿では、フォン・ウリクト解釈には立ち入らない。

⁹ 私はもともと、以下二つの批判を並置された批判として紹介していた。段階的に理解できるという点は、鴻氏に提案していただいた。

¹⁰ アンスコム自身は「アブダクション」という言葉を用いていない。そのため、これは彼女の試みについての筆者による要約である。

¹¹ アブダクションと演繹的な理論的推論のこの対比については、チャールズ・サンダース・パースも指摘している。

どんな演繹的推論もつぎのような公式にはめこむことができる。「もし A ならば B, しかるに A, ゆえに B」。ところでこの公式における小前提 A は、大前提である仮言命題のなかに、その前件として出現している。したがって、推定的推論は後件から前件への推論とよぶこともできよう。(Peirce, 1868, p.144: 137 頁)

- 12 このことが問題なく認められるのは、最善の仮説への推論の場合である。最善の仮説への推論には、「ほかによりよい仮説がない」という旨の条件が必要となるだろう。どのような条件が必要であるのかは論争的であるが、ここでは論証の配列順序が問題であって、その論争に立ち入る必要はない。当該の条件については、Douven (2017) でさまざまな案が紹介されている。
- 13 この点に関して Ohta (2018) を参考にした。Ohta (2018) は実践的推論の合理性の原理を提示しており、その原理はアブダクションと十分条件型の実践的推論の論証の方向における類似性のみならず、演繹的理論的推論と必要条件型の実践的推論の論証の方向における類似性を示していた。
- 14 アンスコムは他方で、「これら三つのパターンに共通の特徴が認識され、さらに、それらがどのような点において異なるのかが明らかになれば、われわれが異なる種類の推論について語っているのかどうかという問題は、どうでもよいことのように思える」と述べる (PI, p.134: 233 頁)。したがって、たとえばアンスコムはアブダクションが理論的推論の一種であるかどうかといった点にまったく関心がなく、その結果として第三の主張に至ったのかもしれない。そうすると、アンスコムが間違った考えを抱いていたとまで言うのは強すぎる可能性がある。アンスコムはたんに前提と結論が逆向きに置かれるタイプの理論的推論と実践的推論の組だけを考えていて、それ以外のものについて主張するつもりはなかったのかもしれない。しかしそうだとすると、第三の主張はアンスコムにとって不必要で、ミスリーディングである。
- 15 本稿の主題は実践的推論であるため、ほかの理論的推論は扱っていない。
- 16 本稿は、JSPS 科研費 20J21481 の助成を受けた研究成果の一部である。本稿の内容は、柏端ゼミ、認識論読書会の参加者諸氏のおかげで大幅に改善された。とりわけ鴻浩介氏には多くの助言をいただいた。また、太田勇希氏には、発表資料に言及することを了承していただき、原稿に対するコメントもいただいた。みなさんにこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。

文 献

- Alvarez, Maria (2010). “Reasons for action and practical reasoning”. *Ratio* 23 (4): 355–373.
- Anscombe, G. E. M. (1989) [2005]. “Practical Inference” in Mary Geach and Luke Gormally (eds.) *Human Life, Action and Ethics*. Imprint Academic: pp. 109–147. [早川正祐訳. 「実践的推論」. 門脇俊介・野矢茂樹監訳 (2010). 『自由と行為の哲学』. 春秋社：191–258 頁.]
- Broome, John (2013). *Rationality Through Reasoning*. Wiley-Blackwell.
- Douven, Igor (2017). “Abduction” in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Field, Hartry (2009). “What is the normative role of logic?”. *Aristotelian Society Supplementary Volume* 83 (1): pp. 251–268.
- Fogal, Daniel & Worsnip, Alex (forthcoming). “Which Reasons? Which Rationality?” *Ergo: An Open Access Journal of Philosophy*.
- Geach, P.T. and Anscombe, G.E.M. (1961). *Three Philosophers*. Basil Blackwell. [野本和幸・藤澤郁夫訳 (1992). 『哲学の三人』. 勁草書房.]
- Harman, Gilbert (1986). *Change in View: Principles of Reasoning*. The MIT Press.
- Kenny, Anthony (1975). *Will, Freedom and Power*. Basil Blackwell.
- MacFarlane, John (2004). “In What Sense (If Any) Is Logic Normative for Thought?” <https://johnmacfarlane.net/work.html>. (最終閲覧日：2021 年 5 月 13 日).
- Ohta Yuuki (2018). “The True and The Good as the Twin Ends of Reasoning.” Special Seminar in Waseda University (Unpublished).
- Peirce, Charles S. (1868). “Some Consequences of Four Incapacities.” *Journal of Speculative Philosophy* 2 (3): pp. 140–157. [上山春平・山下正男訳. 「人間記号論の試み」. 上山春平監訳 (1968). 『世界の名著 48 パース ジェイムズ デューイ』. 中央公論社：128–167 頁.]

- Streumer, Bart (2007). “Reasons and Entailment.” *Erkenntnis* 66 (3): pp. 353–374.
- Vogler, Candace A. (2001). “Anscombe on Practical Inference” in Elijah Millgram (ed.), *Varieties of Practical Reasoning*. MIT Press: pp. 437–464.
- von Wright, G. H. (1971). *Explanation and Understanding*. Routledge. [木岡伸夫・丸岡高司訳 (1984). 『説明と理解』. 産業図書.]
- (1972). “On so called Practical Inference” in *Acta Sociologica* 15 (1): pp. 39–53.
- 早川正祐 (2005). 「アンスコムの実践的推論——推論図式に関する一考察」. 『哲学論集』 (34): 73–91 頁.
- 竹内聖一 (2017). 「推論は行為を強要しないアンスコムのウリクト批判からみえてくるもの」. 『立正大学大学院紀要』 (33): 67–82 頁.
- 鴻浩介 (2013). 「実践的推論と行為のなかの合理性」. 修士論文. 東京大学.
- (2014). 「実践的推論の二つの位相」. 『哲学の探求』 (41): 27–48 頁.
- 米盛裕二 (2007). 『アブダクション 仮説と発見の論理』. 勁草書房.